

囚われた

筑摩十幸
挿絵◎孤裡精

美少女捜査官

神代さくら
かみしろ

肛虐魔悦の学園



試し読み版

リアルドリーム文庫



Contents

目次

第一章	さくら見参！……………	4
第二章	潜入捜査……………	14
第三章	魔界の洗礼……………	42
第四章	屈辱の奴隷生活……………	74
第五章	絶望逃避行……………	157
第六章	悪夢の強制受胎……………	209

登場人物

Characters

神代 さくら

(かみしろ さくら)

両親を殺したヤクザに復讐するために、小太刀片手に人知れず裏社会の悪を討つ少女剣士。Bカップのしなやかな体形で、ポニーテールに赤いリボンが映える快活な少女。

徳山 轟

(とくやま こう)

表向きはグランバード学園の学園長。正体は関西魔薬密売組織のボス。禿げて肥え太った醜い中年男。

徳山 ガイ

(とくやま がい)

轟の息子。学園に通う不良。二メートルを超える巨体で好き放題に暴れる凶暴な黒人ハーフ。

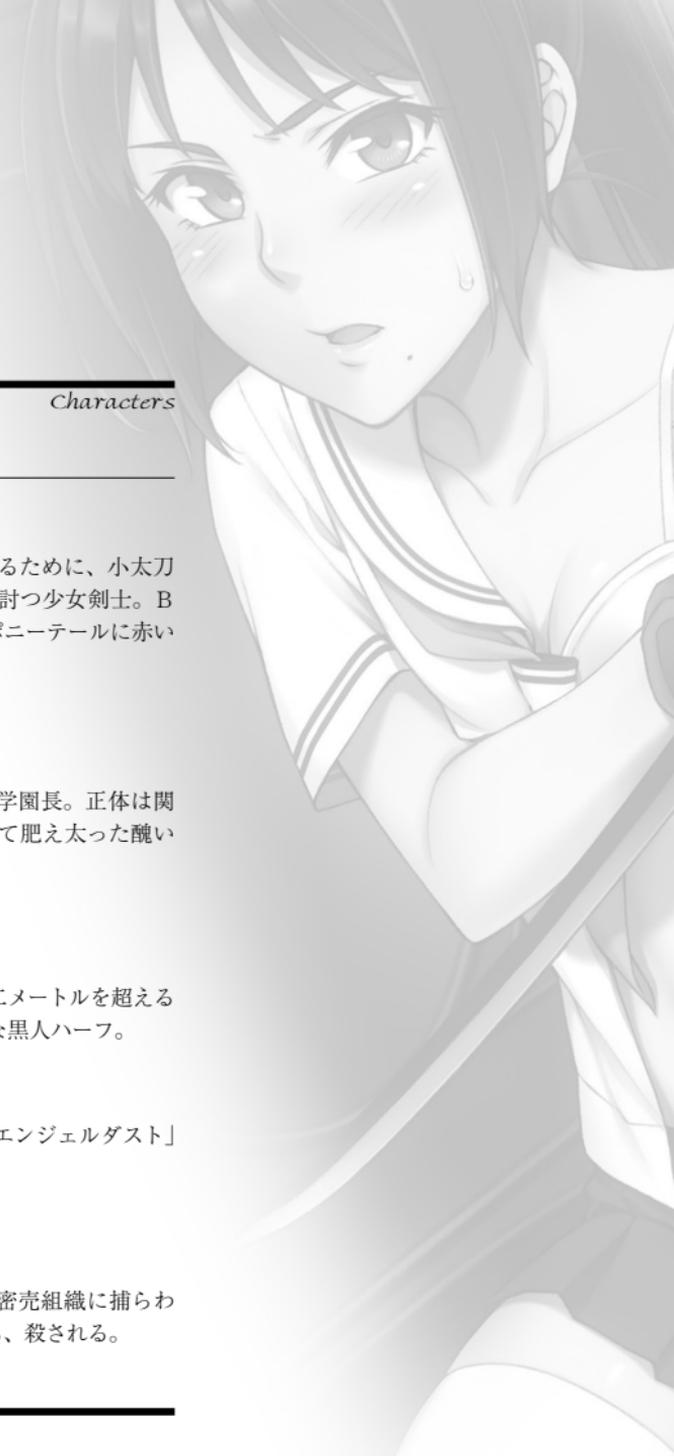
ウー・ダイオン

徳山組に所属し、新型魔薬「エンジェルダスト」の研究に勤しむ老中国人。

神代 慶子

(かみしろ けいこ)

さくらの母親。八年前に魔薬密売組織に捕らわれ凌辱の限りを尽くされたのち、殺される。



第三章 魔界の洗礼

「起き口、さくらあ」

「う……うう……」

バシッと背中を打たれて意識を取り戻すが、異様な光景に困惑する。醜いゴリラが、鉄格子の向こうから自分を見ているのだ。

「もう一発ダあ」

ピシィィィッ！

「うああうっ！」

今度はお尻に一撃。ビリビリと身体を中心にまで届く痛みで、ようやくさくらの意識はハッキリした。

（私は……敵に捕まって……）

鉄格子の柵に顔をつけるようにして磔にされていることに気付く。両手両脚に手錠が嵌められ、それが鉄柵に固定されている。脚は肩幅より広く開かされ、さくらの身体は綺麗なX字を描いていた。

制服の前がはだけられて、シンプルな白のBカップブラに包まれた乳房が露わにな

っている。成長期に相応しくノンワイヤーでカップよりアンダーがしっかりとっている。大きさを保持するよりも、過激な運動でもずれないように包み込んで保護するタイプだ。デザインもシンプルで小さな黒リボンが胸の谷間にあるくらい。

プリーツスカートは捲られ、白のパンティが丸見えだ。パンティはブラと同シリールらしくポリエステルと綿の混合、デザインもいたってシンプルでレースやフリルとといった華美な装飾はほとんどなく、小さな黒リボンがアクセントにあるだけだ。子供を卒業し大人へと移ろう、その一瞬を凝縮した、まさに今のさくらにぴったりの下着だと言えた。

その一方で艶やかな黒髪ポニーテールが鉄柵に長く垂れ下がってまだ一年生の少女とは思えないほどの大人びた官能美を醸し出してもいた。

「散々コケにしやがって。これまでの恨み、タツプリ晴らさせてもらおうゾ」
鞭を振るって嗤っているのはガイだった。前に行ったり後ろに行ったりしながら、血走った目でいやらしくさくらの身体を見つめている。歪んだ笑みを浮かべる口からは、獅子舞のようにゴツイ歯並びが突き出し、野獣のような雰囲気だ。

「こんなぬるい責めで私が屈服すると思ってるの？好きなようにすればいいわ」
「ぬう、生意気ダゾ、お前え」

怒りに火が付いたガイがズボンを下ろし、猛った肉棒を握り出す。黒人の野性味溢

れる巨軀に相応しく、肉棒もかなりの大きさだ。長さは二十センチに迫り、直径も四センチ以上あるだろう。亀頭は傘を大きく張り出し、野太い胴部には血管が太ミミズのように這い回っていた。

(うう……なによ、アレ)

あの時以来八年ぶりに見る勃起状態の男性器。男性恐怖症の気があるさくらにとつては、母を苦しめた不気味で醜悪な化け物に見えた。

「グフフ。コイツはエンジェルフォールのクリームだ。魔薬で狂わせてやるぜ」

巨根に桃色のクリームを塗りたくる。亀頭や胴部がヌラヌラと輝き始め、不気味さがさらにアップする。

「ま、魔薬ですって……!?!」

おぞましさと嫌悪で背筋が凍り付くが、悪人狩りを始めたときからある程度覚悟していたことだ。それに母親が生きているとわかった今、乗り越えるべき試練でしかない。

「ぐへへえ、いくぞお、ファックだ!」

清楚な純白パンティーを膝までずり下げる。エンジェルフォールを塗りつけた黒い剛棒で強引に貫いてきた。

「うあ……あああつ!」

メリメリと音が聞こえそうなほどの迫力で、肉棒が花卉をこじ開け食い込んでくる。粘膜に染み込む魔薬成分が、カアッと身体を熱くする。

「くう、させるもんですかっ」

必死に内股に力を込めて、括約筋を締め付け、邪悪な肉槍の侵入を拒もうとするさくら。だが、暴虐の圧力は凄まじく、ジワジワと押し込まれてしまう。耐えがたい苦痛を表すように紅グローブがギュッと拳を握り締めた。

（い、いたい……ああ、シン……私、穢されちゃう！）

暴虐に神聖な処女膜はもはや裂ける寸前。汚辱と激痛に苛まれるさくらの脳裏に、幼馴染みの少年の顔が浮かぶ。

（私……私は……彼のこと……ずっと……）

あの時から、孤児院で出会ったときからずっと好きだったのだと、今さらながら気付かされる。悲しみに封印した心の奥には温かい愛がしっかりと息づいていた。それをこんな時に気付かされるなんて……。悲しくて悔しくて、勝ち気な瞳に思わず涙の粒が浮かんだ。

「ぐへへへ、ざまあみろ！ もう少してオマエのバージン頂きだあ！」

勝ち誇ったように嘯うガイ。最後の一突きの前にさくらを見下し、勝利の雄叫びを上げていく。

「……させない」

「ンあ？」

「これ以上入れさせないんだからっ、この馬鹿ゴリラッ！」

叫ぶと同時に怒りの頭突きが凌辱者の鼻っ柱にぶち込まれた。

「うがあ……いい、いでえ……」

思わぬ奇襲を受けて鼻血を噴き出してよろめくガイ。まったく予想していなかったのか、目を白黒させている。

「ふううっ……なによこれ、笑っちゃう！ お粗末すぎて、蚊が刺したほども感じないわよっつ！」

「なんだとお、オデを馬鹿にしやがってえ！ オオオッ！」

腰をグイグイ動かして力任せにねじ込もうとするが、ガードは堅い。むしろ柔らかなスリットに擦られて、ガイのほうが快感に吞まれそうになる。

「ハアハア……なんて、しぶとい……女ダ……ハアハア……こつちが先に出そうになつちまうぞ……グググ」

「ふ、ふん……そんなもの？ 全然たいしたことないじゃない。デカイだけで役に立たない、ウドの大木とはあんたの事ね」

余裕の笑みすら見せて挑発するさくら。もちろんダメージはあるのだが、それはお

くびにも出さない。

「んだとおおっ！ 殺すうっ！」

「やめんか。勝手に試験用のエンジェルフォールを使いおつて、馬鹿者が」

「大事な実験素材を傷物にされては困るネ」

そこに轟とウーが姿を現した。二人ともさくらにやられた負傷を包帯で隠している。

「あんたたち……よくも……」

アーモンド型の瞳をカッと見開いて、新たな敵を睨むさくら。

「サムライ娘の正体があの時のお嬢ちゃんだったとは驚いたアルね」

ウーがスカートの中のホックを外すと、プリーツスカートがふわりと舞って足下に落ちる。露わになった尻タブには、薔薇の刺青が鮮やかに咲いている。それはウーが八年前に彫ったモノに違いなかった。蕾のように小さかった刺青も、さくらの成長に合わせて大きくなり、開花していた。まるでこの再会に合わせたかのように……。

「黒髪の似合う美少女になって戻ってきてくれて嬉しいぞ、さくらちゃん。きつと母親のように僕に肛門を犯されたかったんじゃないやろな。フヒヒ」

楽しんでに嗤う徳山轟。ポニーテールをスウツと梳き流した掌が、今度はヒップの辺りを撫で回してくる。

「黙りなさい！」

怒りも露わにさくらは叫ぶ。

「私は親の仇を討つために来たのよ！ 絶対に復讐してやる。脳天を叩き割ってやるんだから！」

鋭い眼光で睨み、犬歯を剥き出しにして吠える姿は野生の山猫のよう。ウーや轟も一瞬たじろぐほど。

「勇ましいことじゃな。じゃが母親が我々の手にあることを忘れるでないぞ」

「警察内部にも我々の仲間は大勢いるヨ。たとえば、母親の死体を捏造することも簡単ネ」

「つまり、もう助けは来ないということじゃ。ヒヒヒ」
「く……く」

確かに検死結果をごまかせるくらい警察内に汚染が進んでいるとすれば、かなりやつかいな事態だ。しかも元々さくらの潜入捜査は非合法なものである。表立って警察が動くことはないだろう。

「ママは無事なの？」

「ちゃんと生きておるぞお。そのうち会わせてあげよう。さくらちゃんが儂らに絶対服従し、セクシーで淫らなアナル牝奴隷に堕ちた時にねえ。フヒヒ」

横に立った轟はポニーテールをつかんでクンクンと匂いを嗅ぎながら、薔薇の刺青

が彫られたヒップを脂ぎった手で撫で回す。

鍛えた臀筋によつて持ち上げられたヒップラインは芸術的とも言える官能曲線を描き、お尻の谷間もキリツとノミで削ったように深い。全体にスレンダーな印象のさくらの身体だが、お尻だけはプリプリツと張つて早熟な色気を醸し出していた。

「牝……？ ドレイですつて……？？」

「そうじゃよ。浣腸でヤク漬けにした肛門を犯しまくつて、さくらちゃんを浣腸とチンポなしでは生きられないアナルマゾに調教してあげよう、母親のようにねえ」

「完全な魔薬中毒にして、スカトロ、獣姦なんでもありの変態AV女優にするのも面白いアルよ」

「絶対オデの子を孕ませてやるう。ぐへへ……公開出産ショーだあ！」

三人の悪鬼たちが血も凍るような恐ろしい計画を語り出す。まさにここはこの世の地獄、悪魔の狂宴なのだ。

「馬っ鹿じゃないのっ。誰があんたたちの思い通りになるものですか。私は特殊な対魔薬訓練を受けているのよ。あんたら自慢のエンジェルフォルだつて私には効かないんだから」

気丈に反抗を続けるさくら。何十種類もの薬物をごく少量ずつ摂取することで耐性をつける訓練を数年間受けてきた。直前にガイの暴行を退けたことも自信に繋がって

いる。

「確かにエンジェルフオールが効かないとは驚きじゃな」

「特異体質によるものか、とても興味があるね。でも新薬の実験にはもってこいヨ」
ウーの狂人めいた目が鋭いメスのように光る。人を人と思わない悪魔のようなゾツとする眼差しだ。

「これは日向組から盗み出したデータを元にエンジェルフオールを改良したものじゃ名付けて『エンジェルダスト』。これをさくらちゃんに試せるとは夢のようじゃわい」
轟が鞆からガラスの筒のようなモノを取り出した。容量は一〇〇ccほどで、怪しげな桃色の液体が満たされている。

「フン……好きにきなさいよ。私は絶対にあんたらに負けない。所詮クスリなんて一時的なモノよ。効果が切れればどうってことないし、墮とされた人は心が弱かっただけ。私は違うわ！」

さくらは強気な態度を崩さなかった。どんな薬物も精神力で克服できると信じて疑わない。

「ほほほっ、若いのお。そこがさくらちゃんの魅力でもあるがな」

「親父、オデに……オデにさせてくれ」

ガイが割り込んできた。余程さくらに恨みがあるのだろう。ハアハアと鼻息も荒く

父親にせがむ。

「む？ お前が後ろに興味を持つとは珍しいの」

精力絶倫の黒人ハーフ少年はもっぱら媚肉専門だ。彼の規格外の巨根をアヌスで受け入れる女が滅多にいないというのもあるだろう。そのガイがさくらの肛門に対しては欲情の目を向けている。どんな男も虜にしてしまう、それだけの魅力があるということだろう。

「まあよかろう。お前も女を墮として一人前の男になってみせろ」

「おおおっ！ サンキュウ、親父！」

轟がガラス器を渡すと新しい玩具をもらった子供のようにはしゃぎ、スキップしながらさくらの背後に回り込む。白桃を二つ並べたようなプリプリの尻タブをゴツイ手で押し広げニンマリと嗤う。

「さくらのお尻、プリプリだな……グヒヒ」

「ひあっ!!」

剥き卵のようにスベスベの尻肉の谷間は深い。その谷底で固く閉じた蕾はピンクがかったセピア色。恥ずかしそうにキュッと窄まる放射状の皺にも乱れはない。

「フヒヒ、生意気さくらに浣腸だあ！」

涎を垂らさんばかりに舌舐めずりしながら嘴管部分を近づけてくる。

「馬鹿馬鹿！ そんなところやめなさいよつ、変態……ひいつ！」

冷たいガラスの先端に肛門を貫かれて思わず悲鳴がこぼれる。

「グフフ。くらえよお、さくらあ」

グイッと太いシリンドラーが押され、魔葉がチュルチュルと腸内に流れ込んできた。

「うあ、冷たい……くっ……気持ち悪い……あううっ」

冷たい感覚はすぐさま灼けるような熱さに変わり、驚いた双臀がえくぼを刻んでキユッと強張る。生まれて初めて味わう異様な感覚に、背筋がサッと鳥肌立つ。

「力を抜くのじゃ。すぐに気持ちよくなるぞ」

轟も黒髪ポニーテールに頬ずりしながらさくらの剥き出しの下半身を撫で回してくる。ゴツイ掌がお尻の刺青の上を這うたび、嫌悪感で悪寒が走った。

「うああ……気持ちいいわけないでしょ、汚い手で触るな！ 変態！」

親の仇の男に触られるなど、おぞましすぎて肌が腐り落ちてしまいそう。心の底から吐き気がして、さくらは腰を捻ろうとするのだが、浣腸器を挿入されていてはそれもできなかつた。

「全部入ったぜえ。へへ、まだ漏らすんじゃねえぞお」

チュポンツと浣腸器を引き抜き、バシッとお尻を叩く。

「くううっ……」



生まれて初めての浣腸責めにさくらは苦しげに呻いた。量は少ないとは言え、中身は強力な魔薬だ。お腹がグルグルと鳴り、便意が膨らんでくる。その一方でジンジンとアヌスが痺れ、むず痒いような感覚が広がってくる。

(なにこれ……これが魔薬の効果なの……?)

排泄器官に性感帯などあるはずがないと思っっているさくらにとって、それは不気味で不吉な破滅への予兆だった。

「お前に浣腸した改良型は、女体の感度を従来品の三十倍に上げる効果があるネ。でも敏感になりすぎて、実験中の女は発狂してしまったアルよ」

失敗だったと言いながらも顔は残忍に嗤っている。

「ハアハア……さ、三十倍に……ですって？ そんなの嘘よ」

「本当だぜえ、さくらあ。オデも見たからなあ。軽くピンタただけでション便漏らして失神するんだぜえ」

滑らかな半円を描く臀丘を押し広げ、肛門をペロペロと舐め回すガイ。

「う、うあつ……や、やめ……そんなところ舐めるなあ……ああうっ」

ゾクゾクゾクッ！ 舐められたお尻から骨盤に沿って奇妙な感覚がビリビリと走り抜けた。

(何なの……今のは……身体が敏感に……?)

ガイの厚い唇、ぬめった舌、荒々しい息づかい。それらを尻肌が敏感に感じ取る。変化はお尻だけではない。肌という肌が、空気の流れや視線をこれまで以上にハッキリ感じてしまう。まるで全身が性感帯になったようだ。これが魔薬エンジェルダストの効果なのだろうか。

「ハア……ハア……身体が……熱い……うう」

背中や腋の下にジワリと汗が滲む。肉体の感覚は研ぎ澄まされていくのに、精神は雲の上にいるような不思議な浮遊感に包まれていく。魔薬耐性訓練では体験したことのない異様な感覚で、どこまで堪えられるか不安になってきた。

「ククク。どうあるか？」

「ハアハア……ううっ！」

お尻を軽く撫でられただけでビクンッと腰が跳ねてしまう。僅かな刺激にも身体が過剰に反応してしまうのだ。

「だいぶ敏感になってきたね。お前のような生意気娘を拷問するには丁度良いアル」
ウーが電気コードのようなものを何本もつかんで近づいてくる。コードの先端には鱗口クリップが冷たく鋭い金属の歯を剥き出しにしていた。

「まずはオッパイね」

「うう……近づくなっ！ 私に触るなあ……ううっ」

抗議も虚しく白いブラがずらされ、高校一年生の初々しい美乳がプルンツと弾けるように飛び出した。

「ほう、可愛いオッパイね」

「Bカップくらいかな。サイズはこれからじゃが、素晴らしく良い形をしておる。大和撫子らしい上品で綺麗な稜線じゃわい。これは成長が楽しみじゃのお」

「く……み、見るな！ これ以上変なことするな、変態！」

男たちの視線に晒されてカアツと頬が紅くなる。年相応の膨らみは掌サイズで、乳輪も乳首も小さく慎ましく、色も健康的なピンク色だ。左右とも均整の取れた円錐形で、静脈を僅かに透かせる乳肌は、青い果実の生硬さの中に大人の熟れを滲ませている。さくらの性格を表すように、乳頭がツンと生意気そうに上向いているのもこの年代特有の魅力だろう。

「エンジェルダストが効いてくる頃ネ。フッフ、どんな反応を見せてくれるか楽しみアル」

その愛らしい二つのニップルに、拷問用金属クリップが口を開いて近づいてくる。
(ああ……あんなもので……)

鋭いノコギリのような歯は凶悪な拷問具となるだろう。しかも魔葉の影響で身体は異様なほど敏感になりつつある。想像しただけで頬が引き攣ってしまう。

「ほりゃ」

ウーの声と同時に二つのクリップがガチッと嘯みついた。

「あうっ！」

ギザギザが食い込み乳首が無残に押し潰された瞬間、臉の裏に紫電が走った。ツーンと乳腺奥深くに突き刺さる鋭感に思わず顔をしかめるが、声はかろうじて押し殺した。双乳もクリップの重さに負けることなく元の美しいラインを保っている。さくらの不屈の精神を示すように。

「声も出さないとは大したものね。では次はオマ○コね」

ウーがしゃがみ込み可憐なクレヴァスに視線を落とす。こんもり盛り上がった恥丘を飾るのは産毛程度の薄いヘア。縦割れのスリットは開脚にもかかわらずピツタリ閉じ合わさり、神秘の内側を男の邪悪な目から隠している。ついさつきガイに荒らされたとは思えないほど清楚なたたずまいだ。

「やめなさい！ わ、私に魔薬は効かないと言ってるでしょ！」

「グヒヒ。清纯派のさくらちゃんらしい可愛いオマ○コじゃのお。後で永久脱毛して完全なパイパンにしてあげるからねえ」

轟もウーの横に並んで処女の花園を観察する。

大陰唇を左右に押し広げると、ピチッと音がしてサーモンピンクの粘膜と鶉色の肉

真珠が露わになった。さらに薄い小陰唇を広げると処女特有の甘酸っぱい匂いが拡がってきた。

「クンクン、汗とオシッコと恥垢の匂いがするの。お。処女らしい極上の薫りじゃが、女になつたらちゃんと手入れをしないとボーイフレンドに嫌われるぞ」

「う、うるさい！ そんな人いないわよ！ ハアハア……も、もうこれ以上、見るなっ！ クズ、デブ、ゴミ、ブタ！」

女の子にとって一番大事な所を好きでもない男に見られる羞恥と屈辱。

(シン、くやしいよ……こんな男に……)

そして優しい幼馴染みの顔が浮かぶ。愛する人に捧げるべき純潔が今や風前の灯火だった。

「オデがさくらのボーイフレンドになってやるから、安心しろ。グへへ」

欲情したガイがチュウツとアヌスに吸い付いてきた。注入された魔薬浣腸一〇〇ccが直腸粘膜を燃え上がらせ、漏れそうになる。

「あくうっ……誰があんたなんかと……あ、頭おかしいんじゃないの！ はあはあ……もうやめなさい、変態ゴリラ！」

罵声を浴びせてもガイはまったく意に介さず、さくらのアヌスに夢中になっている。必死に窄めるアヌスに、舌をねじ込もうとさえしてくるのだ。

(うああ……なんなの……この感じ……?)

クチュクチュと太い舌でこね回される肛門からくすぐったいような、むず痒いような、妖しい痺れが全身に拡がってくる。排泄器官とは思えない、今まで感じたことのない妖美な感覚に、どう対応していいのかわからない。どんだん呼吸が乱れ、火照り始めた肌がジツトリと汗ばんでいく。

「まだまだこれからアルね」

カチツカチツと左右のラビアに一つずつ、鱗口クリップが残酷な歯を食い込ませてくる。

「うああ……そ、そんなところまで……あううっ！」

確実に少しずつだが身体が敏感になり、痛みも大きくなっていく。

「最後は可愛いおママちゃんにもプレゼントじゃ」

「ひっ！ そこはいやよっ！」

陰核を狙われていると知って美貌を引き攣らせる。クリトリスは女の身体で最も敏感な箇所だ。そこを金属クリップで挟まれると思うと恐怖で全身の血が凍る思いだ。しかも今は魔薬によって三十倍も鋭敏にされているのだ。思わず腰が引けてしまう。

「どれ、浣腸の次は、儂が本格的に仕込んでやるぞい」

ガイと入れ替わった轟が尻タブを押し広げ、可憐な窄まりに何か硬いモノを押し当

ててきた。

「うあつ！ な、なにやってるのっ！ ひゃあああんっ！」

必死に窄まる小さな放射状の皺の中心を狙って、金属棒がクルクルと回転しながらねじ込まれてくる。長さは十五センチ、太さは小指ほどで小さなくびれがいくつもあり、グリップ部分からはコードが伸びていた。挿入の刺激を受けて、魔薬を注入された直腸に便意が急速に満ちてくる。

「うぐぐっ……お、お尻に、変なことするなあ……ああつ！ 何考えてるのよ！ うう……漏れちゃう……やめなさい、メタボ豚あ！」

奥菌を噛みしめ喉を軋ませる。さくららにとつて排泄器官を性の対象として弄ばれるなど、悪魔的な変態行為であり、男たちへの嫌悪がますます強くなる。

「漏らしてもいいんじゃないよ、さくらちゃん。儂がしっかり見ていてあげるからねえ」

「ああ……どこまで変態なのよ……あうう」

恐ろしい魔薬といえども、それを人前で排泄するのは死んでもイヤだった。アナル責めから逃れようと腰を前に突き出すのだが、そこにはウーの鰐口クリップが待ち構えていた。

「ヒヒヒ、逃がさないネ、ほりゃあつ」

小さな肉の芽にも凶悪な金属クリップを噛まされてしまう。

「あひいい~~~~~っ！」

その瞬間増幅された痛みで頭の中に真つ赤な火花が散り、さくらの身体は伸び上がった。痛みもさることながらキューンと未知なる疼きが下腹を締め付けて驚かされる。

(うああ……何が起こってるの……?)

魔薬の影響なのだろうか。これまで完璧にコントロールしてきた身体の反応に違和感を覚える。クリップで挟まれたクリトリスや乳首から時折痛み以外の奇妙な感覚がジンジンと響いてくる。身体全体がドッと汗を滲ませて、湯上がりのように火照りだした。痛みだけなら堪えられる。だがこの新たな感覚変化には不安を感じずにはいられない。

「ぐふふ、魔薬が効いておるようじゃな」

「ハアハア……フ、フン。そんなわけ……ないでしょ」

さくらは相変わらず強がって見せたが、内心は微かに動揺していた。保健の授業で習う程度の知識しかないさくらにくらべ、男たちの異常な変態性欲は遙か上を行っている。さらに得体の知れない魔薬に身体は蝕まれていく。どこまで太刀打ちできるか、だんだん自信がなくなってくる。

「ふむう、なんとも元気で生意気なさくらちゃんじゃ。ちよつと前まで義務教育だつ

たとは思えんのお」

肛門棒を深く根元まで差し込みながら、エナメルのような艶を持つ黒髪を扱いてはその甘い匂いも味わっている。

「では実験を始めるアルね」

轟とガイが一旦さくらから離れ、それを合図にウーがダイヤル式のツمامミを一段階捻った。

ビリビリビリイイイイッ！

「きやあああゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝつ！」

いきなり電撃に襲われ絶叫するさくら。乳首、クリトリス、ラビア、肛門……敏感な女の急所に合計六本のケーブルから高压電流が流れ込んでいるのだ。とても平静を保てるものではない。

いくら鍛えていると言っても、乳首や陰核は鍛えようがなく、ましてや直腸内などまったくの無防備だ。とても声を抑えることなどできない。

「ほれほれ、こんなのは序の口アルよ」

さらにダイヤルを二段階目に捻ってジワジワと電圧を上げていく。

バチバチバチッ！ バリバリバリイイイイッ！

「あぎいいっ！ やめ……うあああああつ！」

拘束された四肢を突っ張らせて、ガクガクと全身を痙攣させる。全身の毛が逆立ち、身体がバラバラになりそうな凄まじい衝撃だ。

「ひぎっ、あひっ、電気い……しびれ……や、や、やめなさいっ！」

感度が上がった身体に高圧電流は想像を絶するダメージだった。乳首とクリトリスが紫電に包まれ、肛門奥深くに火花が散る。顎が裏返るほど首が反り、黒髪ポニーテールが激しく波打った。

「ヒヒヒ。どうじゃな、電気責めの味は？」

一旦電撃責めを中断させ、轟が顔を覗き込んできた。

「ハアハア……うう……こんなの……ぜ、全然、なんともないわよ……ハアハア……肩が凝ってるから……気持ちが良いくらいだわ……ハアハア」

憎まれ口を叩きながら黒曜石の瞳が仇敵を睨む。彼女の中の正義の光は今もまったく陰りが無い。

「ホッホッホッ、口の減らない娘じゃ。もつと仕置きが必要じゃのお」

「まかせろ。オデが黙らせてやる」

「ならコイツを使うといいアル。でも顔は殴っちゃダメよ」

ウーがガイに渡したのは銀色の金属製グローブ。指にコイル状に電線が巻かれ、まるでロボットの拳のようだ。そこから伸びたケーブルは発電装置に繋がっていた。

「グフフウ。覚悟しろよ、さくらあ」

正面に立ったガイが鉄の拳を握り締めると、バチバチと火花が散る。

「うりゃあつ！」

大きく振りかぶった後、ドスンッと重い音を響かせてボディブローが食い込んだ。

「あがああつ！」

内臓を抉られるような衝撃に、少女の身体がくの字に曲がる。そこに追撃の高圧電流が襲いかかった！パンチと同時に電撃を撃ち込む拷問具なのだ。

ビリビリビリビリイッ！バリバリバリイッ！

「ンああああ~~~~~~~~~~~~ッ！」

今度は逆に、弾かれたように弓なりに反り返る。まなじりが裂けんばかりに開かれ、眼球が飛び出しそう。

「敏感になった身体には堪えるじやろう、神代さくらちゃん」

背後に立った轟も電極棒をズボズボと抜き差しする。アヌスに流し込まれた電流は直腸から脊椎を伝って、脳幹を直撃した。

「うあああつ！そ、それに触るなあ……お尻、漏れちゃう……うあああんつ！」

追い打ちを掛ける猛烈な便意に、お尻を左右にクネクネと振り立てる。

「ヒヒヒ。いいね。もつと踊るアルよ」

ウーもダイヤルを捻って三段階目の電流責めを再開させる。

ビリビリビリビリイイッ！　バリバリバリイイッ！

「あきやあああぁっ！」

網膜が真っ赤に燃えて、神経が焼き切れ、血液が沸騰する。

「効いてるようだなあ！　オラッオラッオラアッ！」

ドスッ！　ドカッ！　ドゴオッ！

連続のボディブローが、肝臓や腎臓を狙ってぶち込まれる。大人でも一発で血反吐を吐いて転げ回るであろう強打だ。

（ああ……く、くるしい……お腹があっ）

魔薬によって感度を上げられたせいで、痛みや苦しさも二十倍に増幅されている。腸がねじれ、胃がひっくり返ってしまいそう。便意も暴発寸前に膨れ上がって、今にも漏らしてしまいそう。

「ガハハッ！　苦しめ、もっと苦しめえ！」

腹へのパンチとアナル電極棒、乳首と陰核への強烈な電撃が何度もさくらの身体に落雷する。そのたびに背中が弓なりに反り、汗の滴が飛び散る。サイハイソックスに包まれた太腿からふくらはぎに向かつて痙攣が走り、ローファアの足下がつま先立つ。お腹には拳の形の赤い痣が無残に刻まれていく。

「あぐううう！ わ、私は……ンああああつ！ 負けないい！」

「へへへ、漏らしそうなんだろお、オラオラオラアッ」

ドスンドスンッと重い衝撃が腹筋を突き抜けて内臓に食い込み、背中にまで響く。

「ケホツケホツ……ハアハア……ぜ、絶対に負けない……うぐぐ……絶対に漏らさないんだからあ……あひいいっ！」

「必死な顔が可愛いのお、ヒツヒツヒツ」

轟は電極棒を一回り太いモノに交換し、さくらのアヌスを抉った。

ズブツ！ ジュブツ！ ズブズブツ！

電気を纏った金属棒が抜き差しされ、捲れ返る粘膜に電撃が浴びせられる。

「お尻、あひいいいっ！ あんたたち、全員……許さない……うああ……絶対に許さないわっ……きやああああつ！」

黒髪を振り乱しながらも、怒りに血走った瞳が男たちを睨み続ける。

「やれるものなら、やってみるとイイね」

ビリビリビリイイッ！

「あきやああああつ！」

四段階目の高圧電流に黒髪が逆立ち、何度も白目を剥いて痙攣する。感電する肛門が震えながら電極棒を締め付けてしまう。

それでもなおさくらは堪えていた。真珠色の歯を食いしばり、黒眉をつり上げ、地獄の責め苦に耐え続ける。その無残にして高貴な姿は殉教者の姿を彷彿とさせた。

「四段階目に堪えるとは、なんとという精神力じゃ。想像以上にすごい娘じゃな」

「思わぬ拾いものかも知れないアルね」

一旦責めを中断し、轟とウーが唸るような声を上げた。これまで何百人という女を食い物にしてきた彼らだが、これほど強靱な精神を持った女は初めてだった。しかもまだ年端もいかない少女なのだから驚きである。

「オデ、もう我慢できねえよ！ 親父い！」

興奮しきったガイが本物のゴリラのように胸をドコドコと叩いている。まさに野獣そのものだ。

「ここらで一発やらせないと、娘を壊すかも知れないネ」

「ううむ、仕方ない、やれ。ただし慎重にな」

轟が洪々と許可を出すと、ガイが喜び勇んでズボンを下ろし、再び挑んできた。

「今度こそ、処女をぶち抜いてやるぜえ」

少女の性器には三本の電気コードが取り付けられているが、それを気にせずインサートの体勢に入る。

「はあ、はあ、やめ……ああああつ」

疲労困憊、グッタリしていた所を狙われて、さすがのさくすらも抵抗できない。いやしたくとも力が入らないのだ。

ズブツ……ジュブブツ……ズブズブツ！

粘膜を押し分けて、どす黒い肉棒が少しずつ蜜穴に潜り込んでくる。

「ンあぁっ！ やめろ……あきやあぁあぁっ！」

ギクンツと背筋が反り返り、絹を裂くような悲鳴が迸った。破瓜の傷みも増幅されて味わわされるのだから、たまらなかつた。

(裂ける……裂けちゃうっ！)

股を裂かれて身体が真つ二つになるような凄まじい強姦。そのうえガイ自身がかかりの巨根なのだ。それはもはや拷問と言っていいレベルだった。

「おりやあつ！ くらえ！」

「きやあぁ~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~つ!! っ!!」

強烈な杭打ちをぶち込まれて、ついに処女膜が破られてしまう。紅い鮮血が太腿の内側をツウツと一筋流れ落ちていった。

(ああ、とうとう……私……シン……ごめん)

激痛以上に、愛する人へ捧げるべき純潔を守れなかつた悔しさと悲しさで、目尻に涙が滲む。

「ほほほ、これは眼福じゃ」

破瓜の瞬間を見て嬉しそうに嗤う轟がさらに一回り太い電極棒を手に取り、菊蕾にズブリと突き立ててきた。

「ああ……同時なんて……もう、入れるなあ……うあああんっ！」

直径は三センチ。今のさくらにとつては限界近い太さだ。二本差しにされ、張り裂けそうな圧迫感で息もまともにできない。

「オデのチンポがさくらのオマ○コにはいったぜえ。うほお、気持ちイイぞお」

醜い顔をさらに歪めて嗤うガイ。巨根はまだ亀頭部分しか入っていないが、さくらの蜜肉は最高の味わいだ。何よりも生意気少女の処女を奪ってやったという達成感が、快感を増幅してくれるのだ。

「先つぽにい、きつく締め付けてぴったり吸い付いて……はあはあ、処女とは思えねえ……くおおっ……おらおらあ……もつとくわえ込めよお」

「こつちももつと鍛えて、母親に負けない名器に育ててあげよう」

「うあ、ああ……いたい……や……やめなさいっ！ あああっ！」

薄膜を隔てて肉棒と電極棒が擦れ合う異様な感覚で頭がおかしくなりそう。

しかし肛門を挟まれるうちに、あの日のことを思い出す。肛門を犯されながらも、必死に自分をかばってくれた母のことを。

「ううう、ま、負けない……ああ……絶対にい……」

最後の力を振り絞って括約筋を締め上げ、それ以上の侵入を許さない。驚くべき精神力にガイも舌を巻く思いだった。

「く、くそ……」

「ガイ、無理はするなよ」

「ぬうっ……なら、こうだあ」

ガイが吠え、万力のような手指でさくらの細い喉を締め上げた。

「くは……あがああっ」

魔葉によって全身を三十倍に敏感にされたところに、腸を苛む便意、乳首をに突き刺さる感電、極太ペニスによる破瓜……それに加えて窒息の苦しさまで味わわされて、さくらはもうわけがわからない。パニック状態に追い込まれて、ガクガクと磔の身体を痙攣させるのみ。

「う、あ……はうっ……くるし……んぐうううっ」

顔は真っ赤に紅潮し、噴き出す汗で制服が肌に吸い付く。豪腕に持ち上げられて両足はつま先立ちになり、ほとんど首吊り状態だ。

だがガイにとつては極楽であった。窒息による痙攣が膣肉の締め付けを増幅し、亀頭先端だけでも天に昇るような快美を得られるのだ。そして亀頭を包み込む粘膜の蠢

きには、名器の片鱗すら感じられた。

「グヒヒ、どうだあ、さくら。オデがお前の初めての男だぞお。一生忘れるんじゃないぞ」

勝ち誇ったガイが、さらに両手に力を込めギリギリと締め上げた。頸動脈が圧迫され、脳が酸欠状態に陥る。意識がスウツと薄れ、目の前が暗くなった。

ビリビリビリビリイイッ!

「ひっ、ひいっ……はぎいっ!」

トドメとばかりグローブから電撃が発せられ、白目を剥いたさくらの頭がギクンと後ろに反る。断末魔の痙攣に暴れる腔口が黒い肉傘をキュウキュウと食い締めた。

「おおおおお、すげえ締まるっ……チンポもビリビリ痺れて、気持ちイイぞおおッ」

この巨漢の黒人少年には電撃すらも快楽に変わるのか。感電してピクピク痙攣するする蜜壺にも、意に介さず突入する。

「おりゃあ、くらえ!」

亀頭から走る快美の稲妻が尿道を灼熱させ陰囊をせり上がらせる。爛れるような快楽に包まれながらガイは怒濤の白精を放った。

ドバッドバツ! ドクドクドクンッ!

「あいつ、いやあっ……中に出すなあ……ンあああゝゝっ!」

膣内で爆発が起こったのかと思うほどの凄まじい射精で、身体が浮き上がりそう。野獣のような男に妊娠させられる恐怖と汚辱感で、美貌が引き攣った。

「ほれほれ、こっちも感じるのじゃ」

射精に合わせて電極棒も根元まで埋め込まれ、強烈な電撃を放つ。

「ひぎいいいいっつ！」

これまでで最大の痙攣がさくらの全身を貫く。四肢がデタラメに痙攣して鉄格子をガチャガチャと揺さぶった。汚辱の炎に身も心も焼き尽くされながら、さくらの意識は白濁した闇へと呑み込まれていく。

「はあはあ……うああ……あああ……」

「グフフ、どうだあ、オデのチンポは。気持ちよかったかあ」

黒髪を引き扱き、顔を上向かせると、さくらはかろうじて瞼を開いた。

「はあ、はあ……な、なんとも……ないわ……この……馬鹿ゴリラ……っ」

最後の気力を振り絞って、ガイの顔に唾を吐きかけた後、カクンと頭を垂れる。今度こそ完全に失神してしまっただようで、弛んだ口から垂れた涎がセクシーな黒子を濡らした。

「とうとう気を失ったか。それでも感度三十倍に堪えて、漏らさないのじゃから、神

代さくら、本当にたいした娘じゃわい」

磔のままグツタリしている黒髪少女を見ながらニヤニヤ嗤う。肛門は野太い電極棒をしつかりくわえ込んだままで、その締め付けを想像するだけでペニスが熱くなる。

「エンジェルダストに最後まで堪えたのは初めてヨ。試験は合格ね」

「しかも拷問の中でも、少しずつ身体は反応しておったからの」

轟がいやらしい笑みを浮かべながら、さくらの身体をチエックしていく。

クリップを外された乳首は真っ赤に充血し、硬く勃起させられている。クリトリスも同様で、包皮を剥き上げて肉真珠がピヨコンとそそり立っている。

そして処女を失ったばかりの媚孔からは、白濁と血に混じって女の花蜜がジワリと染み出し、肛門は今も感電しているかのようにヒクヒク痙攣して、電極棒を食い締めていた。それはおそらくさくらが初めて見せる女の反応であろう。

「強い心と感じやすい身体。本当に実験用の牝になるために生まれてきたような娘じやな。ホッホッホッ。これで思う存分魔薬実験ができるわい」

「では次の実験に進むネ。ヒヒヒ」

神代さくらという最高の素材を得て、マッドサイエンティストたちは顔を見合わせ、邪悪に微笑む。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

二次元ドリームノベルズ

姫騎士

とろ蜜美女めぐりの
桃色バスツアー

日常に密着したエロス
リアルな舞台設定で送る
官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

戦うヒロインを屈辱させちゃう
かなり過激な
陵辱系ライトノベル!

小説家になるこの男性向けサイト
「ノックダウンノベルズ」
から書籍化!

ビギニングノベルズ

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ?

あとみっく文庫

呪詛喰らい師

あの人気作品の
外伝作品もあり!
電子書籍でしか読めない電子書籍

フリーダム120%!
ジャンルにとらわれない
ドキドキキアラノベル!

二次元ぷち文庫

新世界
ドキドキキアラノベル

ドキドキキアラノベルな
ハイレム系
ライトノベル!

二次元ドリーム文庫